

産神問答・隠岐郡海士町保々見

令和3年7月13日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男



語り手 徳山千代子さん
(明治37年生まれ)
収録・昭和47年2月26日

あらすじ

昔々、遍路さんがサイの神さんのところで休んでいました。

さて、夜中になって、「サイの神さん」と起こす者がおりました。箒の神と櫛桶の棒の神でした。「村にお産がある。時間になったから、サイの神さん、行きましようや。」

「そんな一緒に行くかわい」神さんたちは村へ下って行き、夜明けに帰ってきた。遍路さんが聞き耳を立てていると、「よかつた。お産は無事にすんだけど、男の子の方は気の毒だいで、しゃあがねえだな」女の子は、がいに幸せな子で、一日に塩を三合も使う身分を持って生まれとるけど、男の子は一年に一回の塩を使うだけしか運を持っておらんが、しかたがねえだわい」と話し合っていたそうです。

遍路さんは、「おかしなことを言うわいな。わしや夢見ちよつたらあか。とにかく聞いてみらんかっただけん」と、そ

れから村へ下って「タベ、この村に産がありましたか」と聞いたら、「ありました。男の子と女の子と生まれて、女の子の方は、特にいいてこの子でもないけれど、男の子の方は、とてもいいこの子だ」と話してくれたそうです。

何年も経ちました。遍路さんは、神さんの言ったことを確かめようと、その村へ行きました。そうしたら、男の子は死んでしまってもうおりませんでした。しかし、女の子は酒屋の嫁さんになり、とても繁盛しておりました。村の人に男の人のことを聞きますと、「身体が弱いでもないのに、することなすことが、いい方へ向かんで、乞食のやあな生活しとって、酒屋さんの嫁さんが同じ年の同じ日に生まれたらうで、兄弟のようにかわいがって、いつも握りして食わしたりしちよつたに、旦那さんが奉公人にも示しがつかんし、家へ入れて食わすつことはならん、言われて、しかたがないだけん、風呂場へ連れて行って、火焚くところの釜の前へ座らして、そこでいつもご飯食べさせておつたのに、け、こつとり死んだとえ。その女の子の方は墓

立ててやって、今でも祀ちよとえ」と話してくれたそうです。ですから、人間はいつもいいことしなければいけませんよ。ことに女の子は子どもを生むとき、箒の神さんも櫛桶の棒の神さんも回り荒神さんも、みな寄つてこられなければお産はできないのだから。ちゃんと扱わなければいけませんよ。

解説

この話は本格昔話の「運命と致富」に属し、「産神問答」の名前で分類されているが、実際には男女の福分型、炭焼きの子型、蛇と手斧型、水の神型に分かれている。徳山さんの話はこの中で「男女の福分型」に属している。また、サイの神とは集落の境に祀られている神で、道祖神ともいわれている。集落を守護したり、その集落に子どもが生まれるおり、その運命を決める役割を持つている。因幡では縁切りの神であり、嫁入り行列はその前を避けて通るが、伯耆では縁結びの神と対照的な神の性格とされているのもおもしろい。

(元島根大学法文学部教授)



